■論文■

大分にあったドイツ人俘虜収容所

■安松 みゆき■
（別府大学教授）

はじめに

本稿では第一次世界大戦時に、中国青島で俘虜となったドイツ人を収容するために設置された大分の収容所に注目する。当時のドイツ人俘虜収容所は、四国の板東収容所をはじめ、習志野や久留米といった一部の収容所に関して、田村一郎、富田弘、星和彦、瀬戸武彦、堤諭吉、高橋輝和各氏等によってかなり詳細に研究がすすめられてきている(1)。また板東収容所については日独文化交流の証しとして映画で紹介されるほど周知されてきている。しかし大分収容所をめぐっては、その存在すら忘却されてきている印象が強い。そうしたなかで画期をなしたといえるのが、本田洋氏による報告であった。かれは防衛庁の『戦役俘虜に関する資料』を参照しながら、それまでほとんど不明だった大分収容所の大枠を紹介した。だがそれ以後、本田氏の成果を受けた調査は行なわれず、そこで滞ってしまった状態にある。

したがって本稿の目的は、これまでの研究状況を踏まえながら、新たな資料を加えてより詳細に検討することで、大分収容所でのドイツ人俘虜たちの暮らしの一端を提示することになる。具体的に参照する主な資料は大分県立図書館所蔵の『大分新聞』、防衛庁研究所資料館所蔵の『戦役俘虜に関する資料』、ドイツ日本研究所所蔵の第一次世界大戦時のドイツ人俘虜に関する写真、そして『大分黄表紙—鉄条越し患者のための本—（*Das Oita Gelb-Buch Ein Buch für Stacheldrahtkranke*）』（以下『大分黄表紙』と略記）である(2)。特に『大分黄表紙』は、別稿にて公表しているように、大分収容所に収容されていた俘虜のひとりで、版画家・日本美術史家のフリッツ・ルムプフ（Fritz Rumpf, 1888-1949）が一九一九年に制作した冊子である。印刷は習志野収容所に移ってからすすめられており、大分での生活を、十八枚の手彩色の施された挿し絵を含み、三五頁で紹介するものである。この冊子は美術資料といえるものだが、ここでは歴史資料と見做し、それを用いながら収容所の生活の具体的な再現を試みる。

一　収容所について

一・一・収容所の位置

まず大分収容所の位置について確認したい。

『大分黄表紙』の表紙には、「Das Oita-Gelb-Buch」の表題と、楕円形の挿し絵が見られるが（図1）、この挿し絵に描かれた建物は、大分の第二収容所と思われる。大分収容所が開所されたのは一九一四年の十二月とされる。大分に連行された俘虜の数についてはまだ確定していないが、瀬戸武彦氏と田村一郎氏の研究成果を参考にするならば、一四一名の俘虜が熊本等を経由して大分収容所に送られてきたという[3]。そのうち、将校クラスの十三名は、第一収容所といわれる「大分の赤十字支部」に収容され、残りの準士官以下の一二八名は、第二収容所とされた大分県立第一尋常小学校、現在の金池小学校内に振り分けられたとされる。『大分黄表紙』の制作者であるルムプフは下士官のため、第二収容所に収容されていたので、『大分黄表紙』の表紙に描かれたのは第一尋常小学校の第二収容所となる。以後その資料の関係で主に第二収容所をとりあげる。

当時の小学校には四棟の建物が建っており、そのうち最も南側の校舎が収容所として利用された。小学校内での収容所の設置となるために、収容所との境にあたる運動場の中央部に六尺（一・八m）の板掘が立てられていた。その状況を示す挿し絵がある（図2）。そこでは上に有刺鉄線が這られた板張りの塀の穴から、俘虜が外を覗き見している様子が描かれている。本文によれば、覗いた先に俘虜は田植えをしている若い娘を見つけ、彼女たちの着物から胸がはだけ、また彼女らの丸い尻が見えることで、喜び驚いている。

小学校は、大正十一年の地図[4]でわかるように（図3）、現在の場所と同じ大分駅近くの金池にあり、今も残る盲学校や、現在の別府大学の前身である豊州女学校が、そして北側には大分の繁華街が隣接していた。とはいえ当時の小学校の周囲はまだ田圃であった（図3）。小学校から見える大分の情景を示す挿し絵では（図4）、俘虜が収容所内を散歩している背後に、汽車とその右側には煙突のあ

図1『大分黄表紙』表題挿し絵

図2「柵から覗く男」
『大分黄表紙』9頁挿し絵

図3　第一尋常小学校周辺地図
（大正11年）

図4　「収容所内を散歩する二人の俘虜」『大分黄表紙』21頁挿し絵

は大和組豊後製糸所であることがわかる。所は、長野県の大和組が大分に進出して、分の上野町に二六〇釜の工場を操業していた(5)。

大分以外の収容所が新たに建設された建物や寺院を転用して利用されていたのにたいして、大分の場合には小学校のなかに開設され、田圃に囲まれているとはいえ、駅や繁華街からも近く、交通の便利な場にあった。俘虜たちも完全に街から隔離されていた環境ではなかったことはまた、後述するように遊廓通いの理由で脱走する事件が他の収容所に比べて頻繁に生じていることを物語っている。

一・二・俘虜の服装および寝具

大分収容所の俘虜たちは各自の所持していた服装の着用を許可されていたが、俘虜の間では、たとえば大正四年五月に戦利品として交付を受けて配付された衣服については互いに転売したりして融通していたという(6)。また俘虜達は体裁を重んじていたとされ、衣服の保存には十分な注意を払い、外出着と普段着とに分け、外出着には折り目をつけるなどしていたという(7)。寝具に関しては歩兵第七二連隊から、一人につき毛布六枚、藁布団一枚、敷布二枚、包布一枚が貸与されていた(8)。当時の写真をみると、前庭にベットらしきものが置かれているため(図5)、ベットで寝起きをしていたと推察される。

図5　収容所内前庭、当時の写真

一・三・収容所内の食事当番

大分収容所の所長の鹿取大佐は『大分黄表紙』に「収容所長は口ひげがある男」と書き留められているが(図6)(9)、たしかに当時の写真でもそのような容貌の鹿取所長を確認することができる(図7)。

図6　「収容所長と二人の男」『大分黄表紙』5頁挿し絵

所長の下での収容所では、かなり自由な時間を与え

図7　鹿取大佐

られていた。たとえば起床時間も自由だったという[10]。しかし俘虜たちは規則や日課を自ら決めて勉強や運動をこなすなど規則正しい生活を営んでいた[11]。収容所では基本的に自炊であった。だがその自炊は、一時の食欲を単に満たすものでなく、異国にあっても美味なる母国の料理を思い出しながら本格的な食事が作られていた。『戦役俘虜に関する資料』には、俘虜のなかにホテルの料理長だったものや菓子職人がいたことが記されているからである。挿し絵でも、「ダヴィディス夫人のレシピにそって調理する」場面が描かれている（図8）。その当時の金池小学校の辻教員なる人物は、後に小学校記念冊子のなかで、俘虜が料理するとそのバターのしつこい臭いがしてきて小学校側で困っていた、と書き留めている[12]。『戦役俘虜に関する資料』の収容所内の配置図によれば、この教員の体験を裏付けるように、小学校の校舎に近い北側に炊事場が設けられていた（図9）。『戦役俘虜に関する資料』の「俘虜労役種類調査票」には、「食監料理が軍隊に伝習された」とあるが[13]、残念ながらそうした料理がその後大分に伝わったような形成は、現在のところ確認されない。

炊事に関して、「俘虜労役賃金支給の資料」からは、炊事係、炊事当番に賃金が支払われており、炊事係は下士一人が担当して一日十二時間従事し、一日七銭が支払われ、炊事当番は兵卒の三人で一日一人四銭が支給されていた[14]。

第一収容所の俘虜たちの場合には、美味しいものを外からの差し入れで手にすることがあった。大正四年四月一日付けの『大分新聞』には、テニスコートの向い側で新聞や本を読んでいた少佐たちのところに突然の来客として俘虜の夫人が面会に来たことが伝えられている。面会に来た夫人は、「たくさんのシュークリームとカステラ、ネープル蜜柑など取り混ぜてある」袋の包みを持ってきて、「外出を禁ぜられて人なつこくなった俘虜達は子供が玩具をもらったように騒ぎ廻っていた」という[15]。同新聞には、俘虜の面会では面会日が設定され、検閲されるものの、実際

図8「料理する二人の俘虜」『大分黄表紙』31頁挿し絵

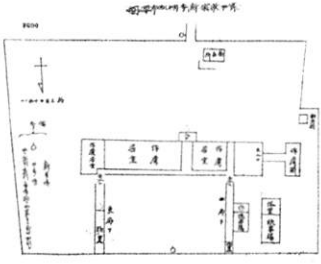

図9　第二収容所配置図

の面会において特に監視もつけずに自由に話しができるような場が設定されていたとある。面会の家族はどこにいたのかというと、面会願いの史料より、別の俘虜の場合には、夫人が子供とともに隣の街「別府温泉」に滞在していたことがわかる[16]。

一・四・収容所内での購買

当時の『大分新聞』を参考にすると、収容所内では酒をはじめ、缶詰め、菓子、果物、たばこ、化粧品、文具、絵葉書、鞄、靴が販売されていた[17]。当時の写真からは日本側よりの物品の運び込みの様子がわかる（図10）。挿し絵では旅行鞄などが山積みにされている（図11）。そこにはビールも置かれているが、本文によれば、それはもう飲まれてしまったようである。

図10　収容所内に物品が運び込まれている光景

図11　「収容所内の運送会社」『大分黄表紙』33頁挿し絵

ビール瓶については、『戦役俘虜に関する資料』よりすでにエコロジカルな動きがあったことがわかる。当時ビール瓶がリサイクルされていたのである。ビールの空き瓶はわずかなお金と引き換えに回収され、それによって俘虜たちが手に入れた金は俘虜の共有金として、収容所内の冷蔵庫のなかに保管されていたという。

この共有金をめぐって興味深い事件がおきている。大正六年三月十五日に俘虜たちの共通する金が紛失した事件である[18]。日本側が困った対応を迫れらたことを示す事件でもあるため、ここで少し説明しておきたい。

『戦役俘虜に関する資料』によれば、ことの発端は、共有金の紛失に気付いた俘虜が日本側に届け出たことによる。大正六年三月十五日午前九時三十分、第二収容所で共有していた冷蔵庫の保管者の現役海軍二等兵ウォールゲムートと俘虜宿舎長准士官リングマンの二人が、冷蔵庫内に入れていた金箱のなかの現金五円九十銭（五円紙幣一枚と五十銭銀貨一枚および十銭銀貨四枚）が十四日の午後八時三十分頃から十五日午前七時三十分の間に紛失したことを監督将校に届け出た。それを受けて日本側が調べをすすめていったところ、たしかに冷蔵庫の鍵が壊された形跡があったことがわかった。そして証言者として北側歩哨第一番から、十四日午後十時三十分頃に西側当りで不審な音がした

が、特になにも発見されなかったため、日本側の衛兵に犯人はいないという申し出を受けて、日本側は取り調べを中止し、むしろ俘虜の言動に注意することになった。

ところが、その最中に、ドイツ人俘虜より、東屋内の机上に置いていた鏡一個が十四日午後に紛失したという別件の話が出て来た。そのため、歩哨の身体検査を行なうと、先程の北側歩哨第一番の上着から鏡が一個見つかったのである。その理由を本人に尋問した時には、この歩哨はすでに鏡を壊して遠くに投げ捨てており、鏡は所持していなかった。しかし日本側は、本人同行の上、破棄した場所に連行し、最終的に鏡を発見した。その時点でこの歩哨は鏡を窃盗したことをはじめて自白した。この自白を受けて、さらに紛失していた共有金の調べをすすめると、この歩哨が十四日夜十時三十分頃に冷蔵庫のなかにある金箱から現金を盗み、五円は衛兵所のトイレの側壁に隠し、残りは自分の財布のなかに入れていたことが明らかになった。

意外にも日本の歩哨が犯人であったこの事件は司令官に報告されることになったが、しかし日本側としては、その事実は日本の大変な失墜になると判断し、最終決断としてその事実は完全黙秘とし、ともかく現金を元にもどしたという結果で日本側は事件を納めてしまったのである。ドイツ人俘虜たちは最後まで仲間の同僚が犯人だと思っていた、と資料には書かれている。いつの時代にも隠蔽工作が行なわれていたことを、改めて思い知らされる事件といえる。

一．五．酒場

日本側の対応の良さを感じさせるのは、他の収容所と同様に収容所内に酒保を設置させていることに加えて、俘虜の物品購入を便利にするためにも必要な設備として酒保を許可していることである。一定の場所、期日、時間を指定し、酒保で日用品とともに「品質良好価格亦廉なるものを撰び」と『戦役俘虜に関する資料』にあり[19]、良心的な運営が求められていた。酒保は第二収容所内の東北隅にバラックを建設して、俘虜のなかから運営の委員を定めて自営で開設された。将校の場合にはアルコールの種類や量に関して全く制限されずに自由だったが、准士官以下の俘虜の場合には、ビールおよびワイン、そして「ベルモット」の飲酒が許可されていたが、ビールの量は一ヶ月四ダース入り四箱以内に決められていた[20]。酒保ではちょっとした料理も出されていたらしいが、挿し絵でも「現金払いのみ」と書かれたカウンターバーが見られる（図12）。カウンター内の俘虜

図12「カウンターバー「現金払いのみ」」『大分黄表紙』17頁挿し絵

図13 「顔に疱瘡のできた俘虜」『大分黄表紙』23頁挿し絵

にはジュネーヴ条約に則って給料が支給されていた。将校は（陸軍）百二十九円、少尉が四十円で、逃亡阻止のために所持金は一人三十円以内に制限され、残りの金は郵便局や第二十三銀行に貯蓄していたことが知られる[21]。収容所内での楽しみは、酒であり、「酒瓶は私の伴侶。私の子供。そして私の春。・・・　ここで生きていくなかでこれ以上すばらしいものはない」とまで記されているほどである[22]。しかし、それも過度になると、隔離されることになる。本文では、暗闇を好み、顔面に蒼い斑点が認められる病人の存在が言及されており、それに見合う挿し絵もある（図13）[23]。

一・六・保養

俘虜のなかには、リューマチにかかっていたようで、それを治癒するために日光浴をしている光景が挿し絵で残されている（図14）。俘虜たちは、地面の草の上に直に裸から出された主なアルコールはビールであろう。カウンターの下にはキリンビールの宣伝のポスターが貼られている。俘虜たちで横たわって、強い九州の日ざしを受けている。砂湯のように挿し絵では地面から熱気が上昇しているように描かれている。また、収容所内の屋外の一角には、サナトリウム「ローラント・コーナー」と名付けた場所も設けられていたことが、挿し絵から理解される（図15）。「ローラント」は、ドイツの中世の町に守護される英雄の騎士名に由来すると思われる。このコーナーでは俘虜たちは地面の上に直接横たわらず、長椅子で体を休めている。本文からは、音楽を聴きながら、時には読書をしながら、休息していたようである。

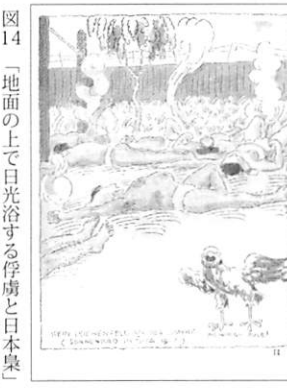
図14 「地面の上で日光浴する俘虜と日本梟」『大分黄表紙』11頁挿し絵

図15 「サナトリウム「ローラントコーナー」」『大分黄表紙』15頁挿し絵

一・七. 余暇

収容所での余暇として、チェスを楽しんだり[24]、楽器を演奏して音楽を堪能していた[25](図16)。当時の『大分新聞』には、ヴェーデル少佐がピアノを、ブエン中尉がヴァイオリンを弾いて、英国人作曲の「デ・ゲイシャ」を奏でたことが報道されている[26]。

挿し絵や写真からわかるように、収容所内では、操り人形の人形劇がおこなわれていた。当時流行っていたF・ポッチによる道化師カスパールを主人公とした「トルコのカスパール」「制服を着たカスパール」「医者のカスパール」などシリーズで上演されていた[27]。演劇も上演され、女装した俘虜もいるが(図17)、舞台美術にはかなり力を入れて本格的に行なわれている。演目にはレッシングの「ミンナ・フォン・バルンヘルム」や、ゲーテの「共犯」、ベンディックス「追放された学生」、カーデルブルクの「火薬樽」、ラウフスの「自然治癒」が知られている[28]。

体を鍛えるために俘虜はスポーツをおこなっていた。主なスポーツは他の収容所にも認められるようにテニス、サッカー、器械体操などである[29]。『大分黄表紙』に描かれているのは、テニスをたしなむ俘虜たちである。テニスコートでプレーする俘虜にはテニスウェアが用意されて、ラケットも揃えられていた。別の資料によれば、将校にはコーチまで付いていたとされる[30](図18)。

『大分史』などでドイツ人俘虜が紹介される際に用いられるのが、小学校の運動会に参加した俘虜たちの写真である[31](図19)。かれらはそこで重量挙げや、器械体操の模範

図16　ラウベでの演奏会

図17　演劇の場面

図18　「テニスをする俘虜たち」『大分黄表紙』19頁挿し絵

図19　小学校の運動会で模範体操する俘虜

図20 「収容所内を散歩する俘虜」『大分黄表紙』27頁挿し絵

る。

ドイツ人はいまでも好んで散歩をするが、捕われの身であってもしばしば収容所内を散歩していた。『大分黄表紙』には、「大通り corso」と呼ばれる収容所内の前庭を俘虜たちが一日の労働の終わりに五〇回も一周していたことが記されている[32]。散歩によってかれらは心身が健康になると考えていたという。挿し絵には、様々な俘虜が一人あるいは二人で話をしながら散歩している様子の他に、本を朗読している者も、また犬と遊ぶものも描かれている（図20）。

そのような散歩とともに日本文化を吸収する機会となったのが、収容所の外へ出かける遠足である。当時の俘虜の書簡によれば、四〇kmほど離れたところまで遠足に出かけていたようである[33]。週一回の割合で出かけ、これが俘虜たちが最も好む慰安になったとされる[34]。

これまで訪ねた場所は社寺仏閣等であることはわかっているものの、具体的に特定されたわけではいなかった。ドイツ日本研究所に所蔵される収容所関連写真のなかには、遠足の際に撮影したと思われる写真が数点含まれているため、今回それらの場所の同定をすすめてみた。

それによってわかったのは、まず「大木がある寺院」とされる写真が、大分市の柞原神社で撮影されていたことである（図21）。柞原神社は大分市のなかでも重要な神社である。千年を超える楠の木が聳え、その横に「日暮らしの門」とその彫り物が写っている（図22）[35]。また当時の巡礼者や参拝者を写した写真も残されている。つぎに場所の特定ができたのが、大分市西寒田神社である（図23）。こ

図21 樹原神社

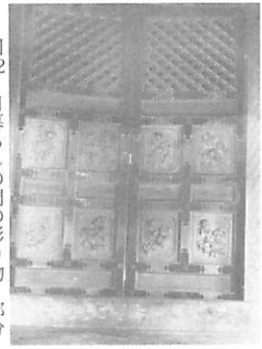

図22 日暮らしの門の彫り物 部分

図23 西寒田神社

の神社は大分市の一の宮とされている社で、現在は手前の石橋と藤で多くの参拝者が訪れている。今回の写真から、新たに鳥居が当時は両部鳥居の木造であり、現在は石造りに変更されたことが確認できる。さらに俘虜たちが訪れた場として理解できたのは、大分市と別府市の境に位置する高崎山である（図24）。現在は野生の猿の餌付けで知られる山である。眼下には、別府湾が広がっている。

図24　高崎山と俘虜

一・八・脱走事件

大分収容所では数回脱走事件が起こっている。そのうちの一例は、すでに紹介されているように、遊廓に通うための脱走である[36]。これは、大分収容所が大分の繁華街に近いという地理的な要因が事件を誘発したものと思われる。しかしこの脱走事件で関心するのは、脱走した行為よりも、遊廓でのしきたり等を良く知っていたとされることである。脱走したのは「キウルボルン少尉」である。従兵二人とともに抜け出して遊廓に向かい、遊廓では日本名を記帳のうえに登楼したという。このような日本文化への知識を思うと、キウルボルン少尉自身の高い教養よりも、曹長として俘虜になっていた『大分黄表紙』の作者フリッツ・ルムプフの存在が注目される。かれは、第一次大戦以前より日本の近代の文芸グループ「パンの会」のメンバーの一人だったからである[37]。「パンの会」では江戸文化の再評価がなされており、メンバーのルムプフも江戸文化には強い関心を抱いていた[38]。そのため、第二収容所に収容されていたとはいえ、ルムプフから具体的な指南があったと考えても、それほど無理なことではないであろう。

そしてこのルムプフはもうひとつの大分収容所での脱走事件に関わっていた。この脱走事件についてはほとんど知られていないため、ここで少し詳しく紹介しておきたい。

事件は大正五年三月十九日の夜に起っている[39]。当日の夜にビールをかなり飲んで酩酊した俘虜の陸軍伍長ケートル三六才が、他の俘虜と脱柵できるかどうかを言い争い、一旦就寝したのち午前十二時頃に他の俘虜の外套を身につけて脱柵したという。しかし、途中で疲労のために民家に立ち寄り、人力車を雇って収容所に引き返している。その後脱柵の原因を問いただすと、「酩酊の結果、「ルンプ」との賭けを実施した」と回答してきた。「ルンプ」とはすなわちルムプフのことである。この資料には、同日のほぼ同時間に、四人が「色情制し難く買淫を目的に」脱走し、目的を達することができず二時間ほどでもどっていることも書き留められている[40]。

一・九．葬儀

大分収容所では、残念ながら二人の俘虜が病気で亡くなっている。『戦役俘虜に関する資料』には、すでに大分収容所に収容された時に疾病で三人が収容され、そのなかに慢性の不治の病にかかっていた者がおり、それは衛生病院にて収容されていたと書かれている[41]。不治の病の患者が何人だったのかは、資料には記載されていないが、おそらく二人が亡くなっているので、二人がそれに該当するだろう。

大分で亡くなったひとりキースヴェッター Kieswetter の葬儀に関しては、当時の写真が残されている。葬儀は小さな礼拝堂のようなところで行なわれ（図25）、市中を葬送の列が通り（図26、27）、大分市内に埋葬された。収容所のなかに礼拝堂があったとは、前述の配置図からすると考えづらい。『戦役俘虜に関する資料』からは、宣教師が収容所を訪問しているものの葬儀とは関係ない時期であることが確認できる。おそらく市中の大分教会などを用いて葬儀が行なわれたと推察される。埋葬先については、久留米市教育委員会の堤氏の御教授により、大分市志手に現存する聖桜ヶ丘陸軍墓地であることがわかった（図28）。当時の写真では周辺にはみかん畑の広がっていたが、今では住宅街に変貌している。聖桜ヶ丘の名称よりわかるように、大分でも有名な桜の名所となっている。墓地は日露戦争から第二次世界大戦までの戦没者が対象となっているが、キースヴェッターの墓は、大分収容所で病死したもう一人の俘虜クラインとともに、第一次大戦で戦死した日本軍兵士の墓の列と少しずれたところに配置されている（図29、30）[42]。歴史家小泊立矢氏によれば、大分における埋葬では、外から来た場合には、既存の住人と同じ墓地には埋葬されないという伝統があるとされ、そのために、現在でもその制度が守られている可能性が考えられ

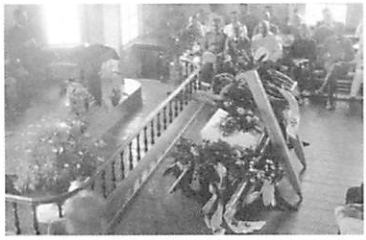
図25　キースヴェッターの葬儀

図26　キースヴェッターの葬列

図27　キースヴェッターの葬列

図28　聖桜ヶ丘陸軍墓地入り口

図29　正面奥キースヴェッター(右)とクライン(左)の墓

図30　キースヴェッターの墓

る。ただし、墓地入り口の立て札の記載によれば、墓地は昭和三十四年に一度整理されているため、当時の写真と照らし合わせると、当時に埋葬された場と現在の碑の建つ場とが必ずしも一致していないことがわかる。とはいえ、いまでも花が供えられたあとが見受けられ、大分の人々によって大切に守られている。

以上、大分の収容所でのドイツ人俘虜たちの生活を資料を用いて再現してみた。たしかに従来指摘されているように、戦争俘虜であってもかなり人道的な扱いを受け、ドイツでの通常の生活に近い規則正しい日課をこなしていたことがわかる。

二　大分におけるドイツ人俘虜の意味

第一次大戦時のドイツ人俘虜の存在は、前述したように、日本におけるドイツ文化導入の契機となった点で高い評価が与えられてきている。具体的にはベートーベンの交響曲第九番がはじめて日本で演奏されたことや、ボトルシップの作り方やソーセージ等の作り方が伝授されたことなどに象徴される(43)。

そのような観点から大分収容所の場合を考えると、残念ながら現時点では、具体的なドイツ文化の受容と継承を確認することはできない。

では大分にとっていかなる意味が大分収容所でのドイツ人俘虜から見出せるのだろうか。

少なくとも現時点でいえるのは、ドイツ日本研究所において整理された関連写真や『大分黄表紙』が重要な大分の歴史資料の記録であることから、大分の近代の歴史を記録にとどめることに関与したドイツ人俘虜としての価値を見い出すことが可能である。そのことを以下に確認していく。

ドイツ人俘虜が滞在していた大正期の大分の様子は、もちろん日本側において文献や写真での記録が残されており、近年の大分の歴史的回顧を目的に出版されている文献においても、それらを確認することができる(44)。

しかし、特にドイツ人俘虜の撮影した写真のなかには、これまで知られていない大変珍しい記録写真といえるもの

が、見い出せるのである。たとえば水害を記録した写真がある。歴史家末廣利人氏によれば、大分での大正期の洪水は大正十年が知られており、その中心となるのは日田方面とされている[45]。それに対してこの大正七年七月の台風による洪水は大分市内でのことであり、文字情報も少なく、ましてや写真資料も全くないといわれてきている。そのためドイツ人俘虜による市内が水につかった様子を記録にとどめた写真は、大分の歴史を回顧する上で大変貴重な史料であるとの認識を、末廣氏は示している。そのように貴重な歴史を示す写真を具体的にみてみよう。一枚は、おそらく収容所内から撮影したと思われるもので、収容所周辺の田圃がすっかり水に浸かっている（図31）。メモには郵便配達人が戻ってくると書かれている。次の写真は、左に城の石垣が見えている（図32）。歩く民衆のひざの高さまで水が浸水している。場所の特定はできないが町中が水没している場面である（図33）。これら数枚の写真からでも、大分市中が広く床上浸水の被害を受けたであろうことが確認できる。

歴史を記録する写真としては、すでに紹介している梼原神社の参拝者や、西寒田神社、聖桜ケ丘墓地も忘れてはならない。

このようにドイツ人俘虜たちが収容所での日常を記録した写真は、かれらの記録としてだけでなく、大分の歴史を刻む貴重な史料としての価値を持つものであり、それゆえかれらの存在なくしてこの時期の大分の状況を回顧することはできないのである。

図31　大正7年7月の台風による大分市の水害状況

図32　大正7年7月の台風による大分市の水害状況

図33　大正7年7月の台風による大分市の水害状況

おわりに

本稿では、第一次大戦時に大分に収容されていたドイツ人俘虜たちが、収容所においてどのような日常を繰り広げていたのかを、様々な史料を用いて再現することを試みた。それによってかなり自由な日々を送っていたとされる俘虜

たちが、自ら規則正しい規律に基づいた生活をすすめ、また遊廓にいくために脱走したり、日本文化を学ぶ機会としての遠足を実施したりしていたことを確認することができた。大分以外の収容所では、ドイツ人俘虜によって大正期の日独文化交流がすすめられていたことが指摘されてきていることから、大分収容所の場合には、いかなる意義が見出せるのかを考えてみた。その結果、残念ながら具体的なドイツ文化の受容は現在のところ見い出すことはできないが、しかし、かれらが日常を記録に残していた写真のなかには、大分の歴史を振り返る上で、日本側には存在しない貴重な写真が含まれていることがわかった。そのため、ドイツ人俘虜の存在は、大分の大正期の史料的な意味において高く評価されるべきであろう。

最後に俘虜達は、そののち四年弱で戦争が終わり、母国にもどることになるが、当時にはまだ戦争が続行し、かれらの将来は俘虜のまま続くと考えていた。それを示す挿し絵がある（図34）。『大分黄表紙』の最終頁に描かれた挿し絵である。これは十年後に、俘虜達がどうなっているのか自ら想像して描いたものである。一見すると、俘虜たちは木にのぼったり、犬とあそんだりして楽しんでいるように見えるが、手前には物思いに耽る男性や、かえると戯れる男など、少し精神的に病んでいると思われるような行動が描き留められている。決して収容生活がかれらに安定を与えているわけではないことは言うまでもない。

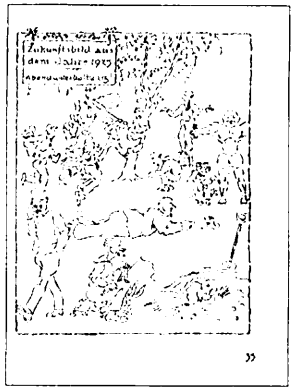

図34「10年後の収容所の様子」『大分黄表紙』35頁挿し絵

そのため、『大分黄表紙』の最後の言葉は「平和よ　訪れよ。しかも早くに。」と、早い戦争の集結を待ちわびている言葉で締めくくられている[46]。ジュネーヴ条約に基づいた人道的な扱いであっても、戦争のない状況にもどることこそが、かれらに強く求められていたことであった。いつの時代にあっても平和こそが戦争の最終目的になることを改めて理解させられる場面である。

本稿は二〇〇八年一〇月十三日に岡山大学において行なわれた日本独文学会におけるシンポジウム「日本独文化交流史上の在日ドイツ兵捕虜とその収容所」で発表した内容に基づき加筆訂正したものである。本稿をまとめるにあたり、特に田村一郎氏、堤諭吉氏、末廣利人氏、小泊立矢氏、大分銀行大学通支店には貴重な御助言や資料の提供をいただいた。改めて深謝申し上げる。

注釈

(1)ドイツ人俘虜収容所については、たとえば以下を参照。富田弘『板東俘虜収容所　―日独戦争と在日独逸俘虜―』法政大学出版局、一九九一年。習志野市教育委員会編『ドイツ兵士の見たニッポン　習志野俘虜収容所一九一五～一九二〇』丸善株式会社、二〇〇一年。瀬戸武彦『青島から来た兵士たち　第一次世界大戦とドイツ俘虜の実像』同学社、二〇〇〇年。田村一郎「「教育・学習機関」としての「板東俘虜収容所」『地域社会における外来文化の受容とその展開』鳴門教育大学・鳴門市共同学術研究事業報告書　研究代表高橋啓、二〇〇三年、一五～二九頁。その他、チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会が立ち上がり、小坂清行氏による同研究会メールが二〇〇九年二月の時点で三六〇号の発行となっているように、関連の情報公開が積極的に行なわれている(http://homepage3.nifty.com/)。

(2)Fritz Rumpf: *Das Gelb-Buch Ein Buch für Stacheldrahtkranke*, Narashino 1919.

(3)瀬戸武彦前掲書参照。

(4)渡辺克己編『ふるさとの想い出　写真集明治大正昭和』国書刊行会、一九七九年。

(5)大分県養蚕販売農協共同組合連合会『大分県養蚕業史』

(6)戦役俘虜に関する資料、０２８９。

(7)戦役俘虜に関する資料、０２８９。

(8)戦役俘虜に関する資料、０２８９。

(9)その他、収容所にかかわった人物には、Oberleutnant Sawada, Nakano, 通訳および監察官 Prof. Nakadai がいる。

(10)戦役俘虜に関する資料、０２８１。

(11)戦役俘虜の関する史料、０２３１。

(12)大分私立金池小学校編集『金池小学校五十周年誌』一九三九年。

(13)戦役俘虜に関する資料、０４４６。

(14)戦役俘虜に関する資料、１０１２。

(15)大分新聞、大正四年四月一日付け　大分県立図書館蔵

(16)戦役俘虜に関する資料、１１６３。

(17)大分新聞、大正四年三月七日付け　大分県立図書館蔵。

(18)戦役俘虜に関する資料、１２４９～５７。

(19)戦役俘虜に関する資料

(20)戦役俘虜に関する資料

(21)戦役俘虜に関する資料

(22)『大分黄表紙』一二二頁。

(23)『大分黄表紙』一三頁。

(24)他の収容所には、ビリヤードがあったが、大分の場合には見当たらない。

(25)戦役資料によれば、他の楽器として笛、太鼓等の所持も許されている（戦役俘虜に関する資料　０２３２）。

(26)『大分新聞』大正五年三月一五日第六二四六号、大分県立図書館蔵。
(27) Haltmut Walravens: *Du verstehst unsere Herzen gut*, Handbuch zur Ausstellung des Japanisch-Deutschen Zentrums, Berlin, 1989, S.47.
(28) Haltmut Walravens: *Du verstehst unsere Herzen gut*, Handbuch zur Ausstellung des Japanisch-Deutschen Zentrums, Berlin, 1989, S.47-60.
(29)他には、木馬、平行棒などがあった（戦役俘虜に関する資料、０２３２）。
(30) Briefen des Kriegsgefangenen Seesoldat Eugen Sommer in Oita, Best angsig. R67-1199, im Bundesarchiv Koblenz
(31)たとえば大分教育委員会『大分教育百年史』一九七六年、九二八頁。
(32) Fritz Rumpf.a.a.O., S.26.
(33) Briefen des Kriegsgefangenen Seesoldat Eugen Sommer in Oita, Best angsig. R67-1199, im Bundesarchiv Koblenz
(34)戦役俘虜に関する資料、０２３３.
(35)このアングルでの写真から、かなり大型のカメラで撮影されていたことが想起される。
(36)大正七年二月九日夜のこととされる（本田前掲論文、一〇四頁）。
(37)拙稿「第一次大戦ドイツ人捕虜の芸術活動」長田謙一編『国際シンポジウム　戦争と表象／美術　二〇世紀以後』美学出版、二〇〇七年、五六～五九頁。
(38)拙稿、五六～五九頁。
(39)戦役俘虜に関する資料、００９９～０１０１。
(40)戦役俘虜に関する資料、０１０１～０１０２。
(41)戦役俘虜に関する資料、０４８６。
(42)近くには、日露戦争時の軍馬の墓もある。他の収容所では軍人墓地に埋葬されているという。
(43)映画「バルトの楽園」は二〇〇六年の春に上映されている。ボトルシップなどについては以下を参照。習志野市教育委員会編『ドイツ兵士の見たニッポン　習志野俘虜収容所一九一五～一九二〇』丸善株式会社、二〇〇一年。
(44)渡辺克己編『ふるさとの想い出　写真集明治大正昭和』国書刊行会、一九七九年。
(45)大正十年の災害は死者不明は二二名、大分、早見、東国東、宇佐、下毛、大野、南海部の七郡に及ぶ大災害であったとされる（（末広利人「裏九州脱却への挑戦　大分県の近現代　二六・大正十年の日田災害」『おおいたの経済と経営』№二〇七　二〇〇七年、二二～二五頁）。末広氏はここで、大正期では七年七月の台風が最大規模の災害をもたらしたと記しているのみで、それ以上の指摘はしていないが、口頭で、その災害に関してほとんど知られておらず、また関連する写真資料も確認していないという助言を得ている。ここで末廣氏にご教授いただいたことに心より感謝申し述べたい。

(46) Fritz Rumpf.a.a.O., S.34f.

図版出典

図1、2、4、6、8、11～15、18、20、34…『大分黄表紙』一九一九年

図3…『ふるさとの想い出写真集明治大正昭和　大分』図書刊行会、一九七九年より

図5、7、10、16、17、19、21～28、31～33…ドイツ日本研究所所蔵写真資料より

図9…『戦役俘虜に関する資料』より

図29～30…筆者撮影